



ishoken
www.ishoken.com/jp/ishoken/

Kawabata Kentaro

川端健太郎

2020年9月に ishoken gallery で展覧会を開催した卒業生の川端健太郎さん(第41期技術コース修了)にお話をお聞きました。(2021年取材)

—— 昨年度は ishoken gallery での展覧会、ありがとうございました。振り返ってみていかがでしたか？

卒業したところで作品を展示するのは後輩が見ているのでいつもの個展とはまた違った、新鮮な感じがしました。

—— どのような意図で展示されましたか？

色々な種類があった方が、作品の変遷が見えるというか、研究生にとっても様々なやり方のものがあったほうが、視野に広がりを持つから、一つに集中してしまうよりはいいかなと考えました。



ishoken gallery での展示作品 (2020年)

—— 川端さんが陶芸を始めたきっかけは何ですか？

高校の進路相談の時期に、クラスの皆の前で「陶芸やります」と言っちゃったのがきっかけです。それまでは特にやりたいことを意識したことはなかったのですが、自分がやりたいことを人前で初めて発した言葉だったので、それを信じて専門学校などを探して進路を決めたという感じです。

—— 前から陶芸に興味があったのですか？

特に陶芸に対する強い思いがあった訳ではなかったのですが、印象で言えば、小学生の時に行った益子の社会科見学で陶芸体験ができるはずだったのに、時間が足りなくなってできなくて、その後海苔みだけが送られてきたこととか…テレビの深夜番組で自分の家の近くの居酒屋が紹介されて、それがストレス解消居酒屋とかいうのでお皿を割ってストレス解消みたいな。それくらいのものでした。陶芸については全く知らなくて、今思えば知らなさすぎてかえって良かったのかな。

—— 専門学校での陶芸の経験が初めてだったということですか？

はい。実際に陶芸をするまで半年くらいかかったけど。始めはデザインの勉強などを。初めて土を触ってみて、こんなもんかって思いました。その時はテラコッタでした。こんなもんかって思ったけど、親に学校へ行かせてもらったという気持ちもあって。クラスの子達は何となく学校にきて、将来のこととか決まっていなくて多分、僕はその時にこれしかないと思って学校に行ったので、やる気は人一倍あったし楽しかった。もし選んだのが陶芸じゃなかったら、高校の時働いていた仕事関係で、電気工事屋さんになっていたのかも知れません。

—— 専門学校を卒業してから意匠研にきたのはなぜですか？

2年生になると、また高校の時みたいに進路相談があって、先生も続けられたって言うてくれたから、まあそうか、続けてみようかなって思っていました。それで、たまたま意匠研のパンフレットを学校で見かけて、こういうところがあるんだと思って見学に行きました。結構田舎でしたが、丁寧に案内してくれたので良い所だと思って。僕は二次試験の補欠で決まって、とてもギリギリ。バタバタで決まりました。



ishokenで授業をする川端さん

—— 卒業してからどのように活動してきましたか？

卒業して意匠研の先輩である加藤委さんのところで一年ちょっとアシスタントをして、その後は多治見の陶磁器卸団地の近くで、遺跡発掘のアルバイトをしながら3年くらい過ごしました。二階建ての一軒家を借りて、一階を工房にして。作品を作りながらバイトして、公募展とかに出しながら。そして最初の個展を2003年に東京の SAVOIR VIVRE でやって。そこからどんどん世界が広がっていきました。

自分だけで作った作品が他人に受け入れてもらえたことが嬉しくて、ここまで続けてこれたかなと思いついて。最初は器も作ったり自分で、徐々に作らなくなって、自分が作りたいものだけを作るようになっていきました。そうやって自分が変わって来た頃から、現代美術のギャラリーのやきものに注目するようになって、関わりもそういうギャラリーの人が少しずつ増えて、自分の意識も周りの環境も変わっていきました。

—— 作品全体にテーマのようなものはありますか？

全体ではないけれど、それぞれのシリーズにはあります。あとは作りながら考えていくので、その時によって違うかな。一つやると、どんどん気づくことがある。始める前に考えていることはあるけど、だんだんそれに沿わなくなってきたりするから、できたものに合わせるのか、自分の頭の方に合わせるのか。作り方にもよるのかもしれないけど、どちらかというときできたものに合わせているということになるのかな。研究生の時、卒業制作のコンセプトを5月くらいに出したけど、卒業制作展の時には変わっていました。根幹は引き継いでいたけれど。

—— ガラスを使った独特な装飾技法は、研究生の時に発見したのですか？

研究生の頃、自分用の特別な土を買いに行っている人もいたけど、僕はお金もなく、意匠研の中で探してやりたいなと思って。手びねりを主に研究所ではやろうと決めて、土のひもに石や砂をまぶして普通の釉薬を掛けて、そこだけニュアンスも変わってくるので、思い出を積んでいくように、作りながら施していく感じでした。ガラスも釉薬の原料なので、石や砂と一緒に入れていて、最初は瓶を割ったりしていたけど色味が少なくて、ビール瓶とかだと茶色くなっちゃうから、卒業した後は少しずつ色味を増やしていきました。今はガラス屋さんで材料を買ってきています。

—— ガラスの流れや色味のコントロールはどうしているのですか？

自分で色々試した経験があって、大きさや付け方の、自分で蓄積してきたものから、これが好きだなんていうのを選んでやっています。

—— 形を作る時は、どの程度まで完成を想定していますか？

つくりながら形を決めていく感じで、大きいものでも最初から完成形を考えているわけではありません。例えば、底が薄くて上の方が厚くても、それに合った形があると思うから。

—— 磁器での手びねりは難しいですか？

本にも書いてないし、自分で探り探りやりました。思い通りにはいかなかったけど、自分が楽しくてやっていたから、とにかくやってみました。それで作品が切れた(亀裂が入った)ら、そういうものなんだなって。その切れたところを自分がどう思うかですね。

—— 切れてしまっても自分がかっこいいと思うかどうかということですか？

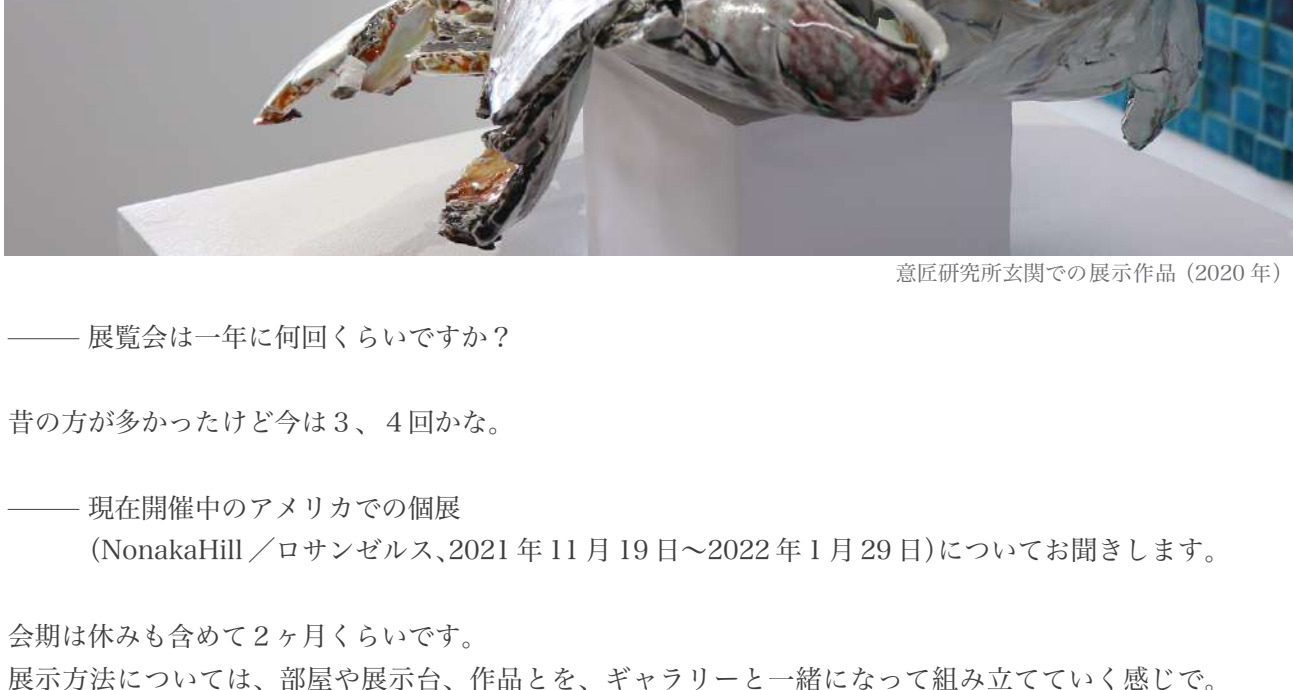
そう。その切れ方を自分の経験としてどれだけ重ねていくかで変わってくるかな。それを受け入れる経験をたくさん重ねてきたから、よかったのかなと思います。これを焼くところなるんだとか、窯から出てきたもので、初めは受け入れ難いけど、毎日見ているうちに、違う面が見えて良く思えたり、個展に出してみても、自分でこっちはいいなと思えたりして。他の人の反応を聞いて、そういうところが気になるんだとか知ることができて、次の作品のきっかけにもなるし。

—— 焼き上がりを完全に計算しているわけではないですか？

計算しているわけではないけれど、焼く前の段階で切れている部分があったら、焼成でどれくらい崩れるかなというの予想しているんで、それなりに想像はしています。作品の崩れ方にしても、普通に磁器だけで作っていたら現れる崩れ方でもないし、ガラスを入れた上での積み重ねたものとか、自分の行動が重なって現れる形だと思っています。だから焼き上がりを見て、最初は受け入れられないものでも、その後だんだん良さがわかるようになってきたときは、自分がもう少しそっちゃん進んでいけるなと感じることがあります。

—— どういう時に一番、作品を作りたいという気持ちになりますか？

土に触ると楽しいのはわかっているけれど、一回離れてしまうと再び土に触るに至らないことも多くあります。遠回しているのか、逃げているのかわからないけど。作ると楽しくてずっと作ってしまうけど、始めるまでの時が一番苦痛です。それは作り出せば解消することなんですけど。そういう意味で言えば作ることで生きていく中の苦痛や鬱憤みたいなものが解消できるのは僕にとってラッキーだと思っています。作品が社会に受け入れられて、世の中とつながりを持つことができたので、自分は陶芸をやっていると良かったなと思っています。



意匠研究所玄関での展示作品 (2020年)

—— 展覧会は一年に何回くらいですか？

昔の方が多かったけど今は3、4回かな。

—— 現在開催中のアメリカでの個展 (NonakaHill / ロサンゼルス、2021年11月19日～2022年1月29日)についてお聞きます。

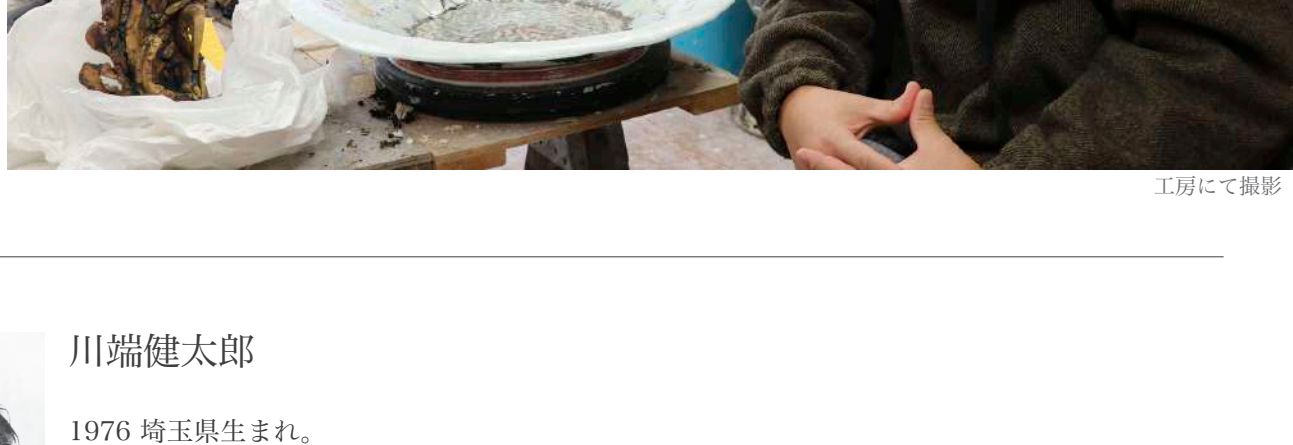
会期は休みも含めて2ヶ月くらいです。展示方法については、部屋や展示台、作品とを、ギャラリーと一緒に組み立てていく感じで、日本のやきもののギャラリーは配置とか、ライトとか変わるくらいだけど、空間から作るようなところが面白いです。

—— そのような展覧会は今回が初めてですか？

同じギャラリーで3年前もやっていて、その時は2人同時個展みたいな感じでしたけど、その時もそういう、空間を作るところから考えました。今回の個展も初日の前日に作品が届いて、そこから作品を組み立てたり展示台を作ったり壁を塗ったり。徹夜で作業して、オープンの1時間前に展示が完成しました。そういうところも、作家が主体なところが日本でやるのとは違った感じで面白いです。見る人の見方も違って、日本のやきものギャラリーだと、なかなかそれ以上のものとしてみてくれる人や、突拍子もないことを言うてくる人とかはいないけれど、海外だと普段セラミックを見ている人以外も作品を見に来てくれて、買って、買っていくと少し認めてくれたような感じもするし、言葉は喋れないけれど、海外での展示は色々新鮮です。

—— 最後に、やきものを志す若者に向けてメッセージをお願いします。

僕でもできるくらいなのでハードルは低いんじゃないですかね(笑)…若者に向けてか…とにかく夢中になれるくらいじゃないかな。やっていって少しずつでもそれが更新できてモチベーションが保てれば良いと思います。それが楽しさに繋がっていくから。



工房にて撮影



川端健太郎

1976 埼玉県生まれ。
1998年東京デザイナーズ学院工芸工業デザイン科卒業、2000年多治見市陶磁器意匠研究所修了。磁器土の柔らかな表情と力強い造形にガラスや釉薬の鮮やかな色が映える独自の世界観の作品で活躍。近年は生命力をテーマにした再生土による作品シリーズにも取り組み、見る者に新たな刺激を与え続けている。
主な受賞歴に、パラミタ陶芸大賞展大賞、益子陶芸展加守田章二賞など。